

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#016(川瀬)(27:13)(2022/09/05)
「マルクス・ガブリエル『新しい実在論』から、ヌーソロジーは何を抽出するか? part.1」

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#016(川瀬)(27:13)(2022/09/05)
「マルクス・ガブリエル『新しい実在論』から、ヌーソロジーは何を抽出するか? part.1」

<https://www.youtube.com/watch?v=2GXwYn5IXZ4>



**Research
Announcements**
#016

マルクス・ガブリエル「新しい実在論」から、
ヌーソロジーは何を抽出するか? **part.1**

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer **川瀬 統心**

マルクス・ガブリエル『新しい実在論』から、ヌーソロジーは何を抽出するか? part.1

川瀬 統心

武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

特任研究員 川瀬統心

研究分野：

ヌーソロジー研究(実践論)

スピリチュアル分析

社会思想関連

経済学(存在論的貨幣論)



みなさん、こんにちは。武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所特任研究員の川瀬統心です。私は、このような分野に関心を持って、ヌーソロジーを中心として研究をしております。本日は、私の研究発表動画第2回目となります。

マルクス・ガブリエル
「新しい実在論」から



**Markus
Gabriel**
マルクス・ガブリエル

ドイツの若き天才。
彼の哲学は、
人類に何を問い、示すのか。

ヌーソロジーは
何を抽出するか？



本日のテーマは、「マルクス・ガブリエル『新しい実在論』から、ヌーソロジーは何を抽出するか?」。若き天才哲学者マルクス・ガブリエルということで、世界的に注目されている、ここ10年ほどの間に世界的に注目されるようになった哲学者ですが、彼のその斬新な主張、新しい実在論というものがありますが、それをヌーソロジー研究者としては、この私がそこから、彼の主張から一体何を受け取り、解釈し、そこから何を抽出していくのか、ということが、今回の発表のテーマとなります。主

【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#016(川瀬)(27:13)(2022/09/05)
「マルクス・ガブリエル『新しい実在論』から、ニューソロジーは何を抽出するか? part.1」

題となります。それでは、早速始めましょう。

※画像は「講談社学術文庫&選書メチエ」のツイッターより



マルクス・ガブリエル
(1980年ドイツ生まれ、哲学者)

NOOSOLOGY
Laboratory

2005年ハイデルベルク大学から博士号取得、25歳
2009年7月史上最年少29歳でボン大学の哲学教授



マルクス・ガブリエル、ドイツの哲学者ですが、1980年ドイツ生まれの44歳ですね。非常に若い哲学者であります。彼が有名になったのは、2009年に史上最年少29歳の若さで、名門ボン大学の哲学教授に就任したという。この頃からですね。若き天才哲学者としてずいぶん有名になったと聞いております。



2013年発表
世界的ベストセラーに

日本でも2018年
翻訳出版され
一躍話題に

NOOSOLOGY
Laboratory



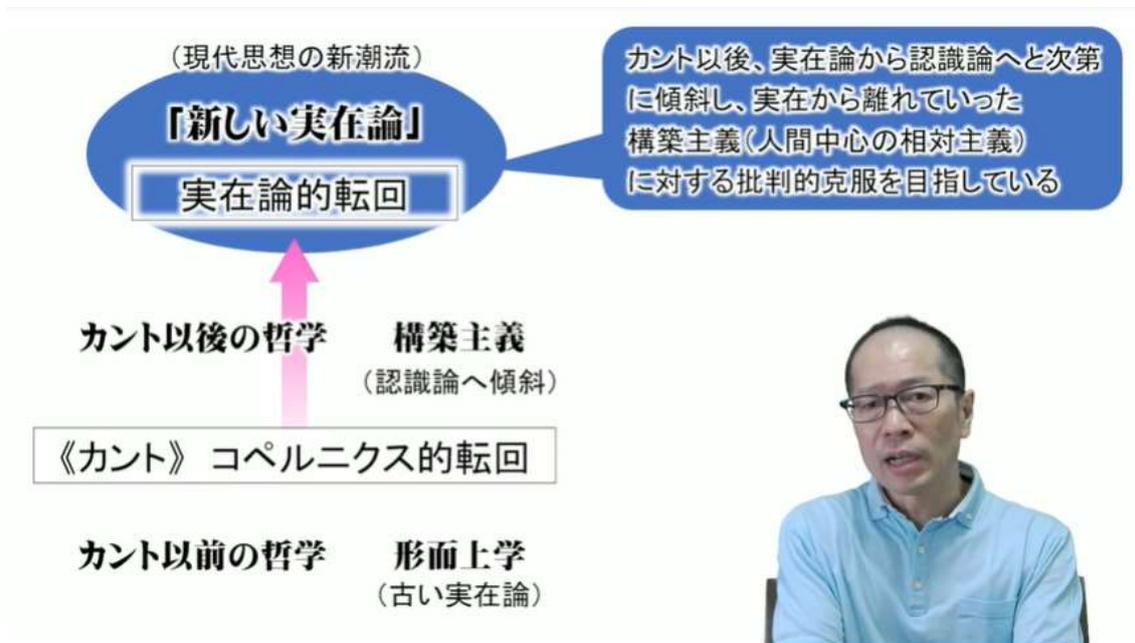
しかし、そんな彼がさらに世界的に知られるようになったのは、この本ですね。『なぜ世界は存在しないのか』。これが、この本が2013年に発表され、世界的なベストセラーとなります。日本でも2013年翻訳出版されて一躍話題になりました。NHKスペシャルに出演したり、様々なメディア、雑誌等

で取り上げられるようになって、彼のこの本も重版に重版を重ねまして、その哲学者というジャンルだけじゃなく、社会学者としての役割ご意見番として、いろいろなジャンルから声がかかり、まさしく世界的に注目される。哲学に興味のなかった、関心のなかった層にまで、この本が手に取られるというぐらい一種のブームを起こしたと言われる、この若き哲学者マルクス・ガブリエルの主張『なぜ世界は存在しないのか』。この本は、このように紹介されています。この本『なぜ世界は存在しないのか』では、あらゆるものが存在するが、世界は存在しないという、新しい實在論の原則を説明しようとしていると紹介されます。

彼自身もこのように説明します。自分の主張は2本柱である。1つは世界は存在しない。無世界論とでも言うべきものです。そして、それを前提としてをした上で、世界以外のものはすべてが実在するという、すべて実在するんだ、すべて実在するというのが新しい實在論の彼の主張なんですね。ただし、世界以外は、ということになります。

そんな彼の實在論。新しき實在論は、現代思想の新潮流ということで哲学研究者の間では實在論的転回と呼ばれます。實在論的転回。この転回という言葉は、それはもうまさしくカントのコペルニクスの転回から来ているわけです。18世紀、哲学者カントが哲学史において、そして、その哲学を中心にそこからつながる諸学すべてにおいて大きな影響を与えた。もう天動説から地動説へとひっくり返すぐらいの衝撃を与えたと言われるカントのコペルニクスの転回。この實在論的転回というのは、カント以降の、それに匹敵する少なくともそのカントの衝撃に匹敵するぐらいの哲学史上におけるひっくり返し。あるいは、揺り戻しというか。そのような哲学観の大きな変化を指して言う言葉ですね。そして、ガブリエルもこのカントを中心として議論を進めていきます。カント以前の哲学とカント以後の哲学として、カント以前の哲学、形而上学と、そしてカント以降に中心となってきた哲学、それを彼は構築主義と呼びますが、こうやってカント以前とカント以後の哲学として、哲学史をざっくり

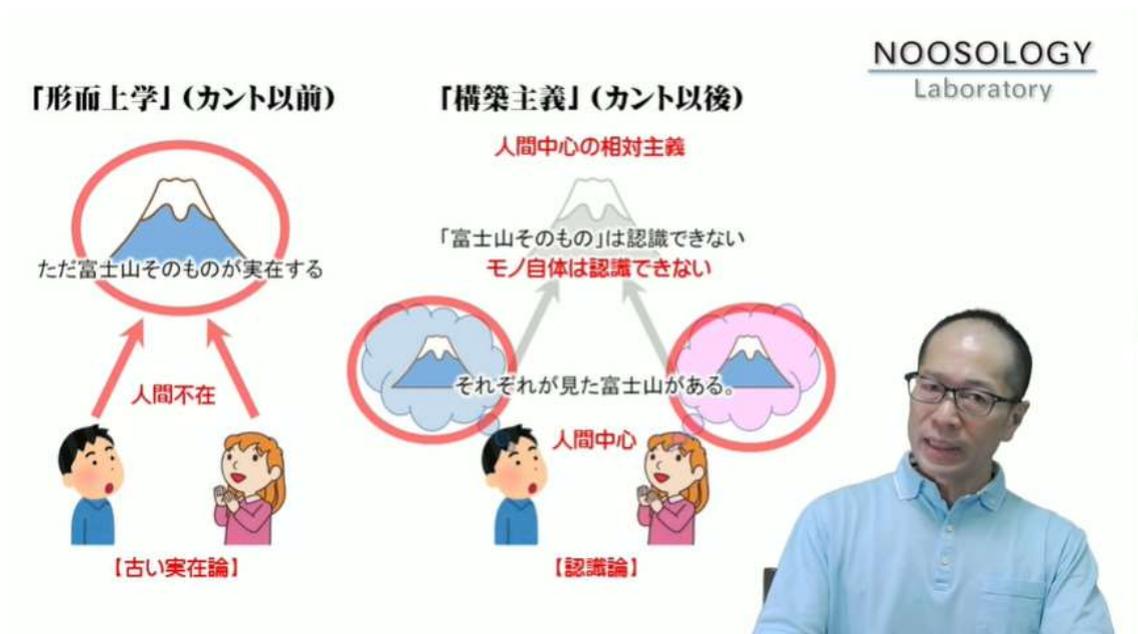
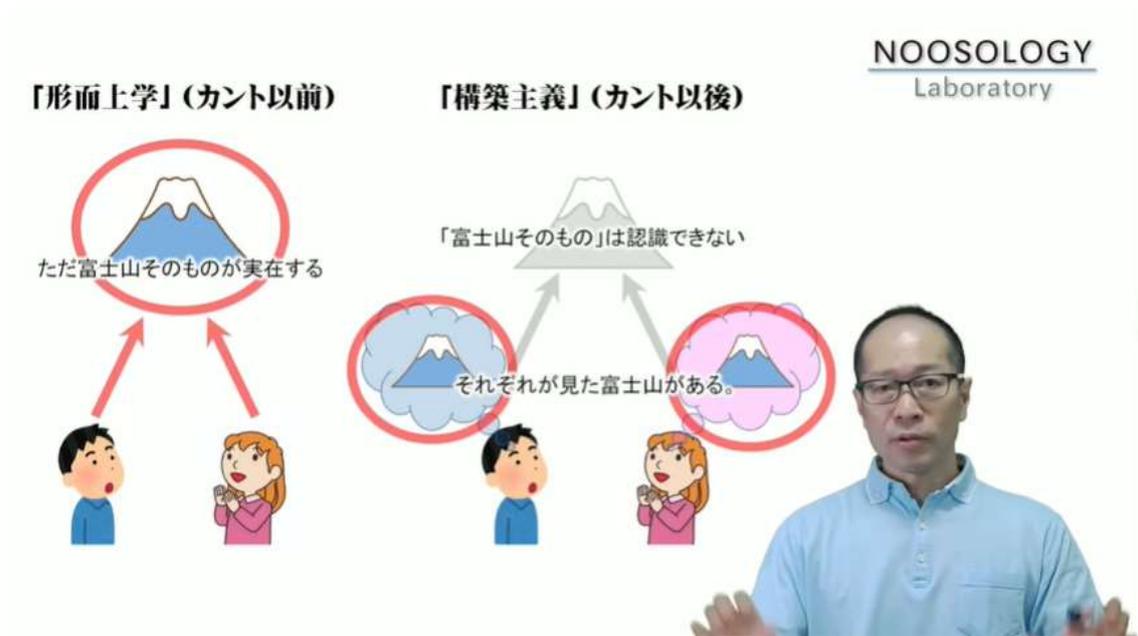
2つに分け、カント以前の哲学は古い実在論。それに対して、カント以降盛ってきたこの構築主義というのは、もはや実在論ではなく、認識論へと傾斜していった。認識のへの変化、そして、それによって何が起きたのかと言うと、実在から離れていったわけですね。



実在を探求していくということが哲学の中の哲学と呼ばれた。まあそれは存在論とも言われるわけですが、それは哲学の中でも最も重要な問いであり、哲学の中の哲学、第一哲学として、存在を問う、実在を問うというのが、哲学の伝統であったにもかかわらず、カント以降はその哲学の主たる関心事が変わっていったんですね。それは認識論への方へと移行していった。そのことによって、実在がだんだん蔑ろになっていった。そこから様々な弊害が起きてきます。端的に言えば、ニヒリズムです。それはニヒリズムの温床に繋がるわけです。ともあれ、そのようなカント以後の哲学、特に、構築主義に対する批判とその克服として、彼は新しい実在論を展開する。これがガブリエルの新しい実在論なわけです。ではその新しい実在論とは一体どのようなものなのでしょうか？

まず何もを分からない、何も知らない方に、簡単に自分の主張の何が新しいのかということで、マルクス・ガブリエルは、こういう喩え話で説明します。彼の本でも、初っ端からその喩え話が出て来ます。それはこのような喩え話です。彼の本の中では、イタリアの山が出て来るわけですが、ここでは日本の富士山に変えて、簡単に彼の意図しているところを説明したいと思います。ここに富士山とそれを見つめる男性と女性がいますね。A君とBさんとしましょう。カント以前の形而上学、古い物の見方は、ここに富士山があって、その二人が山を見ている。そこには富士山そのものは実在する。素朴に富士山が実在するという、素朴な物の見方なわけですね。それが構築主義、カント以後の構築主義の物の見方になるとどうなるかと言うと、富士山はあるけれども、A君、Bさんそれぞれの見方がある。それぞれの富士山があるわけです。しかしながら、富士山そのものは認識することができない。これがカントの物自体は認識できないという意図でしたから、物自体を認識することは

できずに、それを人間ひとりひとりが現象として捉えているわけですね。それがこの図ですね。



それぞれが見た富士山があるということです。つまり、ここから人間中心の物の見方に移ってるわけですね。その意味で言えば、以前の見方、古代の物の見方というのは、人間不在、まだまだいい意味で幼い、子供の時代のような物の見方、素直に目の前を見ていたということが言えるでしょう。カント以後は、その前にまずデカルトの内在の発見から始まるわけですが、そこから人間を中心とした物の見方にシフトしていった。そして、実在を問うのではなく、その人間の見方の認識論の中心に移動していったということですね。これが人間中心の相対主義の見方、相関主義とか相対主義と言われる物の見方になるわけですが、このようなカント以前、そして、カント以降の認識論的な物の見

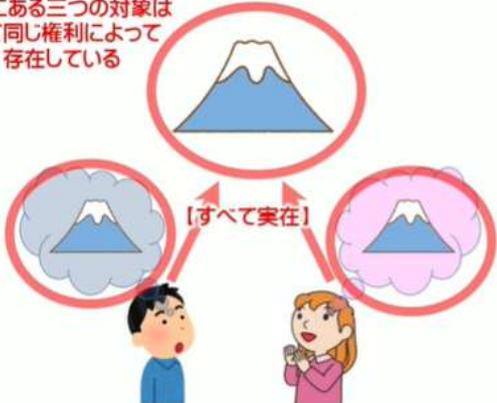
方に対して、それとは全く違った新しい見方であるというのがガブリエルの主張なわけです。

ガブリエルの新しい実在論とはどのような見方でしょうか？ 彼はこのように説明します。ここに富士山があり、それを見ている、A君とBさんがいる。要するにガブリエルは、これら、ここに3つの対象があり、A君の富士山、Bさんの富士山、そして富士山そのもの、それらはすべて実在するということですね。すべて実在する。それぞれ見た富士山も実在するし、富士山そのものも実際するということで、古い素朴な実在論から構築主義の、それぞれ見ている富士山、それはもう全部ひっくるめて、すべて実在する。さらに、それらはみんな同じ権利によって、全く同じ権利によって存在しているというのが彼の言い分なわけですね。まあ一見すると、雑多なイメージがしますが、まずここで、留意しておかなければならない点は、彼は決して実在を問うということにおいての唯物論者ではないということがわかります。それぞれ心の中に抱いているような像、富士山も存在しているというわけですから、彼は決して精神を無視するような唯物論者ではないんですね。さあそれでは、彼の主張がこのような以前の古い実在論からカント以後の構築主義の物の見方まで全部ひっくるめて、すべて実在するというような見方になっていく。一体彼は何が言いたいのでしょうか？

M.ガブリエル「新しい実在論」

※心の存在を認めない科学主義的な唯物論には反する立場

ここにある三つの対象は
全て同じ権利によって
存在している



【すべて実在】

それぞれの見た富士山がある。
「富士山そのもの」も実在する。



その前にまずですね。カントの構築主義の物の見方が出て来るきっかけとなった。それがやはりこのデカルト以来の主客分離問題を見てみましょう。デカルトは、とにかくすべてを疑ったんですね。確かな知識を確立したかったんですね。私たちが何かを偽りのそういう知識を得ていたとしたら、そこから始まる学問すべてが崩れてしまいますから、学がすべて崩れてしまいますから、確かな土台、礎を作りたいかったわけです。それですべてをデカルトは疑いました。もうこの見る感覚器の感じ取る情報、視覚とか聴覚とか、それらもすべて騙されてるんじゃないのか、明らかに明晰明白であるとするされる数学的知識でさえ欺く神によって間違っただのものの中に騙されている数学体系すら、そういうまやかしではないかとか、全部疑ってみたわけですね。そして、疑って疑って究極まで疑い

尽くし疑った果てに、それ以上疑い得ない疑っている私というものを発見したわけです。それが「我思う故に我有り」の我でしたね。ここに、近代自我の出発、近代的自我が産声を挙げたわけです。さあ、そこから、これ以上、間違いのない、これこそ明晰かつ最も正確な出発点として良き自我、真実を見つけたということだったわけですが、まあそれによつてですね。自我と、見るものと見られるもの、内在と外在の分離がそこから始まってしまったわけですね。ですから、そこからもう一度スタートするにおいて、その私が見ている、その自我が見ている、その認識は果たして外界を正しく認識できているのかという、また新たにそこから分離を克服しようとする、その探求が始まるわけです。まあある意味デカルト以前にはこのような問題意識は薄かった、あるいはなかったわけですね。デカルトが徹底して疑い尽くして、疑いの果てに内在を自我を見出すことによつて内在と外在の分離というものが始まったわけですね。自我の確立によつて内在・外在の分離が始まった。ある意味、人間と自然の分離が始まったというわけです。ここから、後世のデカルト以降の哲学者たちは、これらをいかに統合していくのかという課題になっていくわけですね。片や理念・理論的な理性で宇宙の真理・真実に到達できるという合理論、「大陸合理論」。

NOOSOLOGY
Laboratory

大陸合理論

片や人間というのは生まれたときには白紙状態であり、経験によつて外界から知識を得ていくのであるから、その内側のその理念・理想・理性だけで真理に到達するなど土台無理な話であつてと
いうことで、経験の方を重視する、経験や知覚の方を重視する「イギリス経験論」の流れ。このように
全く真逆の方向性からの論争が繰り広げられていったわけですね。

NOOSOLOGY
Laboratory

「一致」するか否か

〈主観・内在〉
認識

〈客観・外在〉
認識の対象

内在と外在の分離

イギリス経験論

しかし、やがてこれは、大陸の合理論は独断に傾いていく、真理はこうであるという独断、理性による独断の方に傾きやすいし、経験論の方は、極端な懐疑、疑いに走りやすいわけですね。そのようなある種の膠着状態、それを目の覚めるような奇抜なアイデアによって、その一撃によって、斬新に統合した。それがカントのコペルニクス的転回だったわけですね。

NOOSOLOGY
Laboratory

「一致」するか否か

〈主観・内在〉
認識

〈客観・外在〉
認識の対象

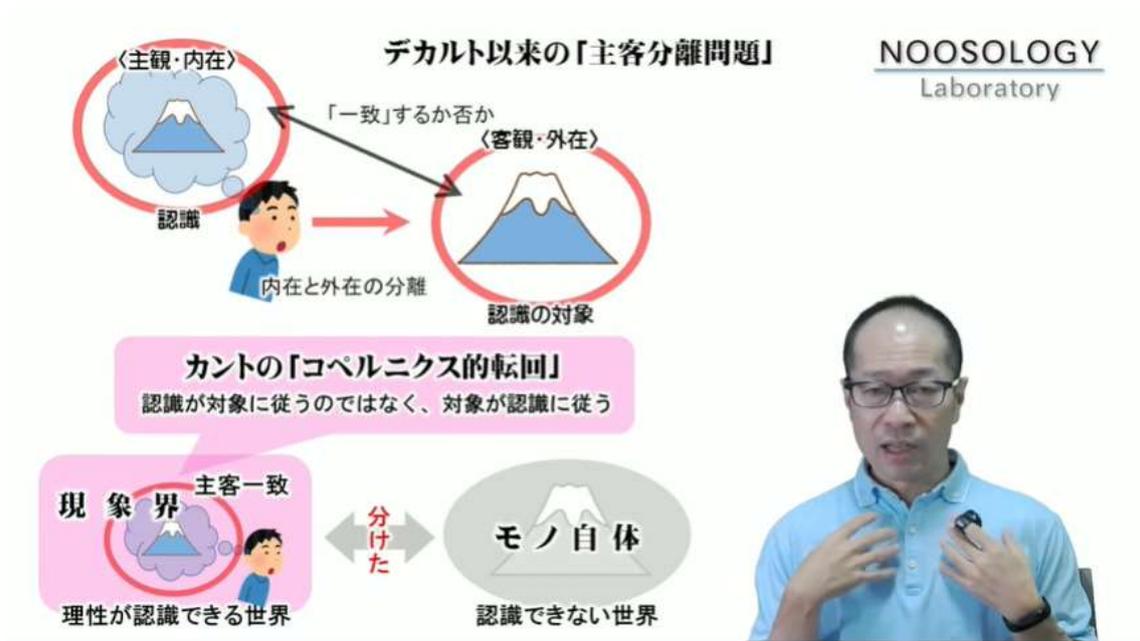
内在と外在の分離

カントの「コペルニクス的転回」

認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従う

カントはそれまでの常識ともいえる対象から外の外界から人間は刺激を受け取って、そこで認識していく、情報を得ていくという、そのような理解をひっくり返しますね。認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従うという、これがカントのコペルニクス的転回でした。しかしながら、このカントの意図というのは、そのようなコペルニクス的転回をするというのは、これは世界を人間が認識できる現

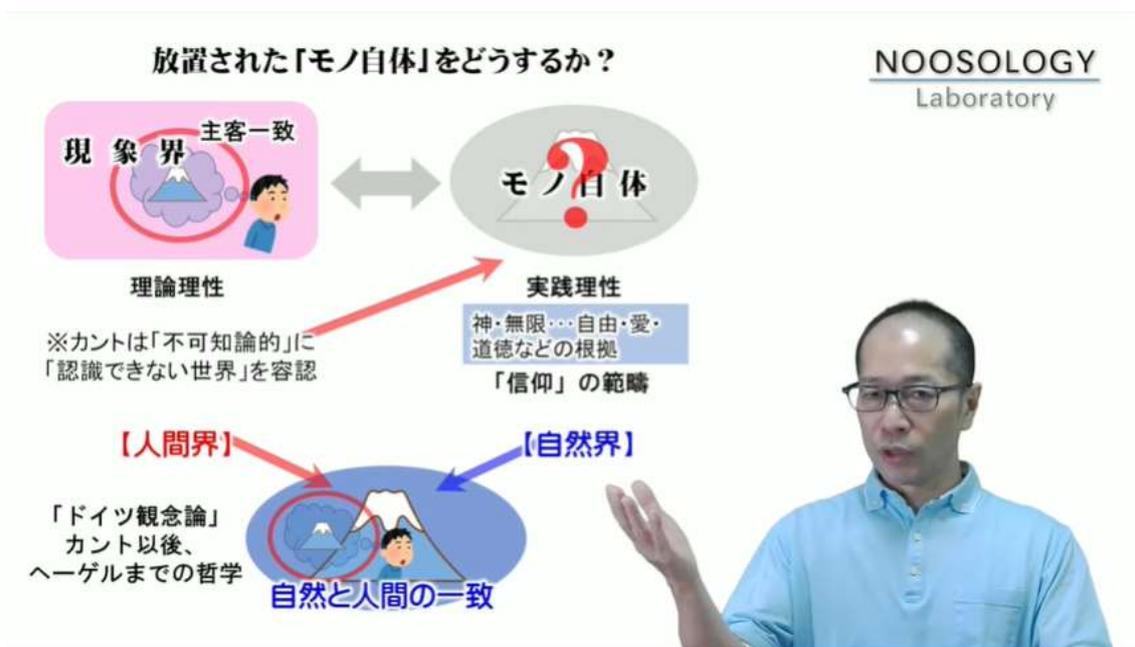
象界と理性で認識できる現象界と理性では認識できないモノ自体に分けた上での、その理性が認識できる世界の様相だとわけですね。その現象界、そして、その現象界において、認識しているものというのは実はこの認識システムが規定している。



ですから、それまでは、時間とか空間とか自分の外側にあったと思われていたものですら、カントにおいては、認識システムの中にあらかじめ備えられた形式であって、それによって時間・空間あるいはその他大中小、大きさとか因果関係とか、様々な外側の、その自然現象とか思われていたものが内側の認識のシステム 12 のカテゴリーなどにカントは分類したり、探究していくわけですが、そのように認識システムによって、内側の認識システムによって、外側を作り出していく。これが現象界の様相なわけですね。それがカント哲学であります。そのように分けたわけですね。ですから、カントにおいて、カントが行ったコペルニクス的転回によって、主客が一致されたわけですが、デカルト以来の主客分離から主客一致を成し遂げたわけですが、それはあくまでも人間が理解できる、理性が理解できる世界という領域においてのことだったわけですね。

さあ、ここで、取り残された、このモノ自体、やはりこれは放置状態になってしまったわけですね。人間が理解できない領域として放置されてしまった。カント自体はこの領域に対して、決して疎んじていたわけではありません。いやむしろカントはこの領域のことをとても大切に思っていましたね。そして、彼は人間が理解できる、理性が理解できる領域は、それは理論理性が理解できる領域であるということであって、しかしながらそうじゃない、理性が理解できない、認識できない領域は実践理性の対象領域として分けるわけですね。すなわち、カントの意図はこうでした。理論理性だけではどうしても愛とか自由とか人間がよく生きるために、よりよく生きるために必要な道徳の根拠を見出すことはできないということに、カントははっきりとそういうふうに意識していたわけですね。人間にとって、その人間がよりよく生きていくための自由とか愛とかそういう徳、道徳の根拠というものはこの理

論理性によるこの現象界にはとても見い出すことができない。やはり神とか大自然、そして永遠の命といったものが前提となって、初めて、それらが道德の根拠になり得るわけですね。まあぶっちゃけ言えばね、死んで終わりだったら、何してもいいっていう、もうそんな無法地帯になるのは、当然だと思われませんか？ もし死んで終わりだったら本当にやりたい放題になるわけです。そこからは何のそういう尊厳とかを見い出すことができない。人間の尊厳の道德の根拠を見い出すのは難しいわけですね？ そこで、カントはモノ自体は実践の領域であると。人間が理性では認識できない、モノ自体は実践領域として残したわけですが、カントにおいてはまだですね。この段階においては信仰の範疇としてですね。この世界を容認して残していたわけですね。



さあ、それでカント以降の哲学者たちにとっては、さあこれらをこのカントによって2つに分けられた世界が問題になっていきます。やはりそうですね。元々はデカルトによって主体と客体、見るものとみられるもの、内在と外在、精神と物質、心と体、人間と自然が分離したわけですが、カントによって成し遂げられた、カントのコペルニクス的転回によって、主客一致が為し遂げられたとは言うものの、それはそのままデカルトの心身二元分離がそのままカントにおける二世界分離に、現象界とモノ自体の2つの世界に分離した。そのまま分離がスライドしただけだと、そのような指摘は私の第一回目の動画で発表させて頂きましたね。ですから、その分離した課題がスライドしただけだったわけですね。当然カント以降は、この分離されたこの世界をもう一度統合する方向に思索が進むわけです。さあ、それで、カントの時代、このときまではまだやはり現象界の方は人間の世界であって、そして人間が認識できない領域はこの大自然の領域というような、まだ分別があったと思われます。大いなる自然に対する畏敬の念と言いますか。そして、それを作り出した神、あるいは、そういう創造主に対する畏敬の念というのがまだ十分あった時代ですね。ですからカント以降の哲学者は今度はその自然を舞台として、人間のカントによって明確にされた人間の認識する領域、現象界を再び統合しようということになります。つまり、自然と人間の一致を図ろうとした。これがカント以

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#016(川瀬)(27:13)(2022/09/05)
「マルクス・ガブリエル『新しい実在論』から、ヌーソロジーは何を抽出するか? part.1」

降、そして、約1世紀の間にヘーゲルによって確立された、カントに始まりヘーゲルによって完成したと言われる「ドイツ観念論」の思索の流れであります。(26:52/27:13)(了)

Research Announcements

#016

マルクス・ガブリエル「新しい実在論」から、
ヌーソロジーは何を抽出するか? **part.1**

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer **川瀬 統心**

References 参考文献

1. マルクス・ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』(2018)(講談社選書メチエ)

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

(出典:【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#016(川瀬)
「マルクス・ガブリエル『新しい実在論』から、ヌーソロジーは何を抽出するか? part.1」
<https://www.youtube.com/watch?v=2GXwYn5IXZ4>)